

「歌詞を重んじる昭和世代」

コロナ禍で忘年会シーズンを迎えるが、時短自粛の流れが続き、どこの職場も本年度は実施を見送る状況であるのはやむを得ない。当然、二次会の定番カラオケもその波をもろに受けるに違いない。

1970年代にカラオケブームがやってきた。その到来は、日本人の歌文化を大きく変貌させた。歌は聴くという受け身の世界から、歌う(DO)という能動的な世界へ移り始め、人々は歌唱力(スキル)を高め、歌謡界へも厳しい視線を送るようになった。天地真理も田原俊彦も歌手としての評価を下げ、武田鉄矢はヒット曲も出したが「音程無き声量」と揶揄された。SMAPの中居君は、SMAPだからこそ歌手として生き残れたのかもしれない。

昭和の歌謡曲を楽しんだ私は、歌詞を重んじていた。レコード大賞の数々の歌は、どれも誰もが分かりやすい言葉が歌詞全体を占めていた。あげればきりがないが、「こんには赤ちゃん(梓みちよ)」「また逢う日まで(尾崎紀世彦)」「いいじゃないの幸せならば(佐良直美)」など、歌詞は全て小学生でも理解できる言葉で綴られていたし、歌にはストーリー性があった。

そんな中で時代の変化を感じる歌が登場した。「目を閉じてなにも見えず♪」で始まる谷村新司の「昴(すばる)」だ。この歌詞に、当時の上方漫才の人生幸朗が「当たり前のことを歌うな！責任者出てこい！」とぼやき漫才で噛みついた(笑)が、時代の変化はこの歌詞ではなく、「あーあー♪さんざめく 名もなき無き星たちよ♪♪」の部分だ。「さんざめく」なんて言う口語体にはない言葉が歌詞に組み込まれ、本当に驚き、歌への理解が難しくなる時代が来る気配がした。

実在しないものも登場した。井上陽水は「少年時代」で、「夏が過ぎ、風あざみ、誰のあこがれにさまよう♪」と歌ったが、「あざみ」は存在するが「風あざみ」はこの世にはない。秋の訪れに風に揺れるあざみの花を歌ったのかと、NHKはこの「風あざみ」の正体を探る特集を組んだが明らかにはならなかった。陽水は「感覚の花？」と言っていた。

レコード、カセットテープ、CDと歌を楽しんできたが、今はDVDになり映像とともに歌が流れてくる。どんな歌にもバックでダンスが繰り広げられ、歌はついに「観る」文化に変わってしまったようだ。踊りながらの歌は、ピンクレディを最後にして欲しかった。

年末恒例の紅白歌合戦は無観客で放映されるらしい。私は、出場歌手も彼らの歌も、知っているのは4割に過ぎない。今年もきっと見ないと思う。

(丹羽 豊)